

## 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究②

——育児感情を規定する育児規範とパートナーとの関係認知について——

### Practical Studies on the Revitalization of “Child-growth” Community in Families, Schools and Local Communities : II

——Personal Norm of Child-rearing, Relationship with the Partner and Feelings of  
Child-rearing——

田中 優\*, 加藤美智子\*, 泊 真児\*, 西河 正行\*, 深津千賀子\*,  
福島 哲夫\*, 古田 雅明\*, 向井 敦子\*, 八城 薫\*

Masashi TANAKA, Michiko KATO, Shinji TOMARI, Masayuki NISHIKAWA, Chikako FUKATSU,  
Tetsuo FUKUSHIMA, Masaaki FURUTA, Atsuko MUKAI, Kaoru YASHIRO

#### <キーワード>

子育て, 育児感情, 育児規範, パートナーとの関係認知

#### <要 約>

本研究では、家庭における「子育て」に関する問題を明らかにするために、育児において経験する感情である「育児感情」と、「育児感情」を規定する要因について検討した。具体的には、「育児感情」を規定する個人的要因として「育児規範」を、環境的要因として「パートナーとの関係認知」を設定し、これらの関連について検討した。調査は、平成20年11月から翌年1月に、東京都下のT市の3保育園に子どもを通わせる父母と子どもの保育園入園を希望する父母の441世帯を対象としておこなわれた。

父母別、および、父母に共通する育児規範、パートナーとの関係認知、育児感情の構造がそれぞれ明らかにされ、これらについて、育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との規定関係が検討され、父母共に、育児の環境的要因としてのパートナーとの関係認知が育児感情を規定するが、父親では、個人的要因としての親の責任感の強さが感情統制不全感に繋がることが示唆された。この背景には、現実的に育児の多くの側面を担う母親と、相対的に育児の限られた側面を担う父親という違いが予想された。今後、育児感情を規定する社会的要因（年齢、就労形態、学歴など）、や子育て環境（子どもの預け先の有無、子どもの年齢、子どもの出生順、保育所通園など）との関連をみることにより、より実際のな育

児の実態を明らかにすることができると考えられる。

(本研究は、「家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究」のテーマで、大妻女子大学人間生活文化研究所の共同研究プロジェクトによる平成20年度、21年度の研究助成を受けている。)

## 1. 問題

### (1) 目的

子どもを育てるということに関して、家庭では、親の教育力の低下、育児不安や虐待が、また、学校では、いじめ、学級崩壊、不登校、教師のバーンアウト、そして、地域では、子どもをターゲットとした犯罪、コミュニティ力の低下などの、家庭、学校、地域が抱える問題は、枚挙に遑がない。本研究では、子どもを育てるという問題に対して、これまでの研究にみられる家庭、学校、地域のそれぞれの養育者の「子育て」という視点ではなく、子どもを中心とした「子育て」という観点から、子どもが育つ人的・物的・社会的環境づくりに焦点を当てた「子育て」コミュニティの再生が必要であると考え(古田・加藤・田中ら、印刷中)<sup>(1)</sup>。具体的には、家庭、学校、地域における「子育て」が抱える問題を実態調査により明らかにし、地域における「子育て」コミュニティの再生プログラムの開発と実施を目指している。

この目標への手始めとして、本研究では、まず、家庭における「子育て」に関する問題を明らかにするために、乳幼児の親を対象とした質問紙調査を実施した。本報告では、現在育児に携わっている親が、育児において経験する感情である「育児感情」と、「育児感情」を規定する要因について検討する。

### (2) 育児感情

母親の育児感情について、柏木・若松(1994)<sup>(2)</sup>は、母親の育児感情には肯定感情と否定感情がアンビバレントに存在することを明らかにしている。本研究でも、育児感情を、育児ストレス、育児不安、また、社会からの孤立などのネガティブな側面と、育児における喜びや、子を育てることの社

会的な意義などから得られるポジティブな側面とから成り立つと仮定した。

### (3) 育児感情を規定する要因

ラザルスとフォルクマン(1991)<sup>(3)</sup>の心理的ストレス理論は、ストレスには、価値観や自己効力感などの個人的要因と圧力や社会的支援関係などの環境的要因が先行条件であるとしている。そこで本研究では、「育児感情」を規定する個人的要因と環境的要因を仮定した(図1)。まず、個人的要因としては、「育児はかくあるべき」という、育児に関する個人規範である「育児規範」を設定した。そして、環境的要因としては、「パートナーとの関係認知」を設定した。育児におけるパートナーとの関係については、山川・柏木(2004)<sup>(4)</sup>は、父母での育児に関して、「夫の家事育児の分担が母親を育児不安から救う鍵を握っている」と述べている。

本報告では、「育児感情」を規定する「育児規範」と「パートナーとの関係認知」の関連(図1)を明らかにするために、①「育児規範」の構造解明(父母別、および、父母込み)、②「パートナーとの関係認知」の構造解明(父母別、および、父母込み)、③「育児感情」の構造解明(父母別、および、父母込み)、④「育児規範」「パー

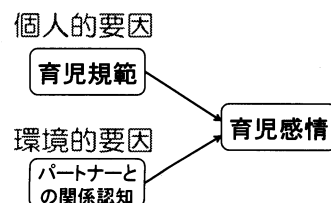


図1: 「育児感情」を規定する「育児規範」と「パートナーとの関係認知」の関連

トナーとの関係認知」「育児感情」の父母間での  
 差違, ⑤「育児規範」, および, 「パートナーとの  
 関係認知」と「育児感情」との規定関係について,  
 それぞれ報告する。

## 2. 方法

### (1) 調査時期

調査は, 平成20年11月から平成21年1月にお  
 こなった。

### (2) 調査対象

調査対象者は, 東京都下のT市の3 保育園に子  
 どもを通わせる父母, および, 子どもの保育園入  
 園を希望する父母の441世帯であった。

### (3) 調査方法

調査方法は, 直接, あるいは, 保育園を通じて  
 調査票を配布し, 郵送または保育園に設置した回  
 収箱により回収した。謝礼は, 回答者のみに, 商  
 品券(1,000円)と調査報告書(速報)を郵送した。

### (4) 調査内容

1) 子育てにおける問題: a 子どもの病気・怪

我, b 子どもの育ち, c 子どもの育て方, d お子  
 さんの祖父母とあなたとの関係, e ママ友などの  
 対人関係, f 自分の心身の問題, g 夫婦間の問題,  
 h 子育てに関係する経済的問題について多重選択。  
 2) 問題の解決方法(相談する人・参考にする  
 情報): パートナー, 親きょうだい, 友人・ママ  
 友, 専門家, 新聞・雑誌等, インターネット等  
 について多重選択。

3) 育児規範, パートナーとの関係認知, 育児  
 感情: 育児に関する「～べきである」という個人  
 規範である「育児規範」(表1), 育児と関連す  
 る「パートナーとの関係認知」(表2), および,  
 育児に伴う感情である「育児感情」(表3)につ  
 いて, 臨床心理学の研究者5名(いずれも, 臨  
 床心理士), 発達心理学の研究者1名(臨床発達  
 心理士), および, 社会心理学の研究者3名(い  
 ずれも, 専門社会調査士)の合議により, 各々の  
 項目を設定した。いずれも, 4件法(1: そう思  
 わない, 2: どちらかといえばそう思わない,  
 3: どちらかといえばそう思う, 4: そう思う)で  
 の評定を求めた。

表1: 育児規範項目

育児規範1	子どもが3歳くらいまでの幼い時期は、母親は子育てに専念すべきだと思う
育児規範2	子どものためになるなら、どんなことでもしてあげべきだと思う
育児規範3	子どもをよりよく育てるために、親は正しい知識を身に付けるべきである
育児規範4	子どものためなら、自分のことは当然ガマンすべきだと思う
育児規範5	どんなことがあっても、親は子どもを怒鳴ってはいけない
育児規範6	子どもがよく育つかどうかは、すべて親の責任だと思う
育児規範7	自己流のしつけで、子育てに失敗することは許されない

表2：パートナーとの関係認知項目

パートナーとの関係認知1	子育てのために、パートナーの気持ちが自分から離れてしまいそうで不安である
パートナーとの関係認知2	育児について、パートナーと意見が合わないことが多い
パートナーとの関係認知3	パートナーは私をねぎらってくれる
パートナーとの関係認知4	パートナーは私ができないことを代わりにやってくれる

表3：育児感情項目

育児感情1	ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う
育児感情2	私の育て方は、これでよいのかと気になる
育児感情3	子どもが順調に育っているのかどうか不安になる
育児感情4	子育てについて誰に(どこに)聞けばよいのかわからないので不安である
育児感情5	思い通りにできないような状況だと、不安になる
育児感情6	子育てでイライラすることが多い
育児感情7	子どもに振り回されてしまう
育児感情8	子どもを育てることで、自分も育っていると感じる
育児感情9	子どもを叱るとき、感情を抑えることができない
育児感情10	他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと不安になる
育児感情11	子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ
育児感情12	心の底では子どもがかわいくないときがある
育児感情13	子育てが思い通りにならない
育児感情14	毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である
育児感情15	人からダメな親だと思われぬか心配になる
育児感情16	子どもの考えていることがわからない
育児感情17	育児について、周りの人に口を挟まれたくない
育児感情18	子育てに時間がとられるので、自分のやりたいことができない
育児感情19	親として子どもに対する優しさが足りないのではないかと思う
育児感情20	子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある
育児感情21	子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする
育児感情22	子育て中にふと「自分は何のために生きているのだろう」とむなしくなる
育児感情23	子どもの育ち(発育)が遅れていると思っても気長に構えていられる
育児感情24	子どもに接する時間ももっと欲しい
育児感情25	電車やバスで、子どもが親の言うことを聞かないので、困ることが多い
育児感情26	子どもを育てている自分に誇りを感じる

### 3. 結果

#### (1) 回収率, および, 回答者について

回収率は, 36.7% (162世帯/293名: 父親129名, 母親163名, 性別不明1名)であった。また, 回答者の平均年齢は35.3歳 ( $SD=5.2$ 歳) (父親: 35.9歳 ( $SD=5.8$ 歳), 母親: 34.8歳 ( $SD=4.6$ 歳))であった。

#### (2) 育児規範の構造

育児規範の構造を解明するために, 育児規範7項目について, 因子分析(主因子法・バリマックス回転)による因子構造の解明を父母別でおこなった。

##### 1) 母親の育児規範構造

母親の育児規範については, 固有値が1.0以上を1つの目安とし, 加えて, 十分なる説明割合を得ることができ, スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し, 単一の因子に.30以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から, 3因子構造(7項目)が適当であると判断した。

第1因子は, 「子どもが3歳くらいまでの幼い時期は, 母親は子育てに専念すべきだと思う」「子どもがよく育つかどうかは, すべて親の責任だと思う」の項目から構成されており『親の責任感』因子と命名した。

第2因子は, 「自己流のしつけで, 子育てに失敗することは許されない」「子どもをよりよく育てるために, 親は正しい知識を身に付けるべきである」の項目から構成されており『正しい育児』因子と命名した。

第3因子は, 「子どものためなら, 自分のことは当然ガマンすべきだと思う」「どんなことがあっても, 親は子どもを怒鳴ってはいけない」「子どものためになるなら, どんなことでもしてあげるべきだと思う」の項目から構成されており『奉仕的育児観』因子と命名した。

##### 2) 父親の育児規範構造

父親の育児規範については, 固有値が1.0以上を1つの目安とし, 加えて, 十分なる説明割合を得ることができ, スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し, 単一の因子に.40以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から, 2因子構造(5項目)が適当であると判断した。

第1因子は, 「子どものためなら, 自分のことは当然ガマンすべきだと思う」「子どものためになるなら, どんなことでもしてあげるべきだと思う」「子どもをよりよく育てるために, 親は正しい知識を身に付けるべきである」の項目から構成されており『奉仕的育児観』因子と命名した。

第2因子は, 「子どもが3歳くらいまでの幼い時期は, 母親は子育てに専念すべきだと思う」「子どもがよく育つかどうかは, すべて親の責任

表4: 母親の育児規範構造

項目	F1	F2	F3	共通性
<b>【親の責任感】</b>				
子どもが3歳くらいまでの幼い時期は, 母親は子育てに専念すべきだと思う	<b>.608</b>	.022	.120	.384
子どもがよく育つかどうかは, すべて親の責任だと思う	<b>.453</b>	.182	.217	.286
<b>【正しい育児】</b>				
自己流のしつけで, 子育てに失敗することは許されない	.249	<b>.602</b>	.036	.426
子どもをよりよく育てるために, 親は正しい知識を身に付けるべきである	-.038	<b>.564</b>	.114	.333
<b>【奉仕的育児観】</b>				
子どものためなら, 自分のことは当然ガマンすべきだと思う	.296	-.002	<b>.465</b>	.304
どんなことがあっても, 親は子どもを怒鳴ってはいけない	.019	.070	<b>.370</b>	.142
子どものためになるなら, どんなことでもしてあげるべきだと思う	.135	.066	<b>.364</b>	.155
負荷量の平方和	.744	.724	.561	2.029
寄与率(%)	27.1	17.1	14.6	58.8
信頼性係数( $\alpha$ )	.434	.499	.383	

注) 主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.35以上を太字とした。

表5：父親の育児規範構造

項目	F1	F2	共通性
<b>【奉仕的育児観】</b>			
子どものためなら、自分のことは当然ガマンすべきだと思う	<b>.586</b>	.027	.344
子どものためになるなら、どんなことでもしてあげるべきだと思う	<b>.485</b>	.309	.331
子どもをよりよく育てるために、親は正しい知識を身に付けるべきである	<b>.454</b>	.146	.227
<b>【親の責任感】</b>			
子どもが3歳くらいまでの幼い時期は、母親は子育てに専念すべきだと思う	.157	<b>.447</b>	.224
子どもがよく育つかどうかは、すべて親の責任だと思う	<b>.052</b>	<b>.447</b>	<b>.202</b>
負荷量の平方和	.812	.516	1.328
寄与率(%)	34.7	21.2	56.0
信頼性係数( $\alpha$ )	.529	.343	

注)主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.40以上を太字とした。

だと思う」の項目から構成されており『親の責任感』因子と命名した。

### 3) 父母で共通する育児規範構造

父母の育児規範の構造が異なったことから、父母での差違を明らかにする目的で、父母で共通する育児規範の構造を導出した。そのために、育児規範7項目について、因子分析(主因子法・バリマックス回転)による因子構造の解明を、父母を込みにしておこなった(表6)。固有値が1.0以上を1つの目安とし、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し、単一の因子に.35以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から、2因子構造(5項目)が適当であると判断し

た。

第1因子は、「子どものためになるなら、どんなことでもしてあげるべきだと思う」「子どものためなら、自分のことは当然ガマンすべきだと思う」「子どもをよりよく育てるために、親は正しい知識を身に付けるべきである」の項目から構成されており『奉仕的育児観』因子と命名した。

第2因子は、「子どもが3歳くらいまでの幼い時期は、母親は子育てに専念すべきだと思う」「子どもがよく育つかどうかは、すべて親の責任だと思う」の項目から構成されており『親の責任感』因子と命名した。

表6：父母に共通する育児規範構造

項目	F1	F2	共通性
<b>【奉仕的育児観】</b>			
子どものためになるなら、どんなことでもしてあげるべきだと思う	<b>.490</b>	.191	.277
子どものためなら、自分のことは当然ガマンすべきだと思う	<b>.474</b>	.169	.253
子どもをよりよく育てるために、親は正しい知識を身に付けるべきである	<b>.359</b>	.068	.133
<b>【親の責任感】</b>			
子どもが3歳くらいまでの幼い時期は、母親は子育てに専念すべきだと思う	.126	<b>.591</b>	.365
子どもがよく育つかどうかは、すべて親の責任だと思う	.161	<b>.394</b>	.181
負荷量の平方和	.636	.573	1.209
寄与率(%)	33.7	20.2	53.8
信頼性係数( $\alpha$ )	.451	.391	

注)主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.35以上を太字とした。

(3) パートナーとの関係認知

パートナーとの関係認知について、構造の一次元性の確認を主成分分析により父母別、および、父母込みでおこなった。

1) 母親のパートナーとの関係認知

母親のパートナーとの関係認知については、第一主成分の負荷量の絶対値はいずれも.44以上で、寄与率は46.2%であったことから、構造の一次元性が確認された。

2) 父親のパートナーとの関係認知

父親のパートナーとの関係認知については、第一主成分の負荷量の絶対値はいずれも.64以上で、寄与率は51.4%であったことから、構造の一次元性が確認された。

3) 父母で共通するパートナーとの関係認知

父母共に、パートナーとの関係認知が一次元構造であったため、父母込みで、パートナーとの関係認知構造の一次元性の確認を主成分分析によりおこなった。結果は、第一主成分の負荷量の絶対値はいずれも.46以上で、寄与率は42.6%であったことから、構造の一次元性が確認された。

(4) 育児感情の構造

育児感情の構造を解明するために、育児感情26項目について、因子分析（主因子法・バリマックス回転）による因子構造の解明を父母別におこなった。

1) 母親の育児感情構造

母親の育児感情については、固有値が1.0以上

表7：母親のパートナーとの関係認知（主成分分析）

項目	負荷量
子育てのために、パートナーの気持ち自分から離れてしまいそうで不安である	-.449
育児について、パートナーと意見が合わないことが多い	-.677
パートナーは私をねぎらってくれる	.804
パートナーは私ができないことを代わりにやってくれる	.735
固有値	1.846
信頼性係数( $\alpha$ )	.602

表8：父親のパートナーとの関係認知（主成分分析）

項目	負荷量
子育てのために、パートナーの気持ち自分から離れてしまいそうで不安である	.649
育児について、パートナーと意見が合わないことが多い	.756
パートナーは私をねぎらってくれる	-.741
固有値	1.543
信頼性係数( $\alpha$ )	.520

表9：父母に共通するパートナーとの関係認知（主成分分析）

項目	負荷量
子育てのために、パートナーの気持ち自分から離れてしまいそうで不安である	-.465
育児について、パートナーと意見が合わないことが多い	-.704
パートナーは私をねぎらってくれる	.789
パートナーは私ができないことを代わりにやってくれる	.607
固有値	1.702
信頼性係数( $\alpha$ )	.533

を1つの目安とし、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し、単一の因子に.40以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から、4因子構造（17項目）が適当であると判断した（表10）。

第1因子は、「親として子どもに対する優しさが足りないのではないかと思う」「子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある」「心の底では子どもがかわいくないときがある」「子育てでイライラすることが多い」「子どもを叱るとき、感情を抑えることができない」「子育てが思い通りにならない」の項目から構成されており『感情統制不全感』因子と命名した。

第2因子は、「毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である」「子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ」「子育て中にふと“自分は何のために生きているのだろう”とむなしくなる」「思い通りにできないような状況だと、

不安になる」「子どもに振り回されてしまう」「子育てについて誰に（どこに）聞けばよいのかわからないので不安である」の項目から構成されており『自己疎外感』因子と命名した。

第3因子は、「私の育て方は、これでよいのかと気になる」「子どもが順調に育っているのかどうか不安になる」「ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う（逆転項目）」の項目から構成されており『育児不安感』因子と命名した。

第4因子は、「子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする」「子どもを育てることで、自分も育っていると感じる」の項目から構成されており『育児幸福感』因子と命名した。

## 2) 父親の育児感情構造

父親の育児感情については、固有値が1.0以上を1つの目安とし、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し、単一の因子に.40以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から、3因子構造（11項目）が適当であると判断した

表10：母親の育児感情構造

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
<b>【感情統制不全感】</b>					
親として子どもに対する優しさが足りないのではないかと思う	<b>.688</b>	.117	.308	-.051	.585
子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある	<b>.669</b>	.312	.095	-.117	.568
心の底では子どもがかわいくないときがある	<b>.660</b>	.204	.094	-.163	.513
子育てでイライラすることが多い	<b>.658</b>	.206	.155	-.099	.509
子どもを叱るとき、感情を抑えることができない	<b>.655</b>	.090	.187	-.004	.472
子育てが思い通りにならない	<b>.475</b>	.252	.206	-.220	.380
<b>【自己疎外感】</b>					
毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である	.009	<b>.633</b>	.058	.069	.409
子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ	.300	<b>.583</b>	.148	-.244	.511
子育て中にふと「自分は何のために生きているのだろう」とむなしくなる	.236	<b>.542</b>	.051	-.297	.440
思い通りにできないような状況だと、不安になる	.292	<b>.496</b>	.052	.051	.337
子どもに振り回されてしまう	.156	<b>.486</b>	.136	-.176	.310
子育てについて誰に（どこに）聞けばよいのかわからないので不安である	.103	<b>.483</b>	.363	-.145	.397
<b>【育児不安感】</b>					
私の育て方は、これでよいのかと気になる	.224	.140	<b>.769</b>	-.052	.664
子どもが順調に育っているのかどうか不安になる	.196	.160	<b>.668</b>	.021	.511
ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う	-.389	-.067	<b>-.425</b>	.320	.439
<b>【育児幸福感】</b>					
子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする	-.028	-.230	-.042	<b>.898</b>	.862
子どもを育てることで、自分も育っていると感じる	-.391	-.007	-.047	<b>.470</b>	.376
負荷量の平方和	3.104	2.121	1.617	1.441	8.284
寄与率(%)	33.9	10.0	8.4	7.5	59.7
信頼性係数( $\alpha$ )	.846	.758	.724	.597	

注) 主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.40以上を太字とした。



表11: 父親の育児感情構造

項目	F1	F2	F3	共通性
<b>【育児不安感】</b>				
私の育て方は、これでよいのかと気になる	.701	.061	.253	.559
子どもが順調に育っているのかどうか不安になる	.653	-.004	.201	.467
子育てについて誰に(どこに)聞けばよいのかわからないので不安である	.588	.043	.118	.361
人からダメな親だと思われぬか心配になる	.455	-.158	.150	.255
<b>【育児幸福感】</b>				
子どもを育てている自分に誇りを感じる	.041	.628	-.095	.405
子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする	.078	.612	-.088	.389
子どもを育てることで、自分も育っていると感じる	-.157	.587	.003	.369
<b>【感情統制不全感】</b>				
子育てでイライラすることが多い	.103	-.090	.607	.387
子どもを叱るとき、感情を抑えることができない	.153	-.077	.500	.279
子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ	.328	-.247	.484	.404
子どもの考えていることがわからない	.288	.088	.444	.288
負荷量の平方和	1.728	1.227	1.208	4.162
寄与率(%)	27.5	16.5	10.6	54.7
信頼性係数( $\alpha$ )	.720	.596	.636	

注) 主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.40以上を太字とした。

(表11)。

第1因子は、「私の育て方は、これでよいのかと気になる」「子どもが順調に育っているのかどうか不安になる」「子育てについて誰に(どこに)聞けばよいのかわからないので不安である」「人からダメな親だと思われぬか心配になる」の項目から構成されており『育児不安感』因子と命名した。

第2因子は、「子どもを育てている自分に誇りを感じる」「子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする」「子どもを育てることで、自分も育っていると感じる」の項目から構成されており『育児幸福感』因子と命名した。

第3因子は、「子育てでイライラすることが多い」「子どもを叱るとき、感情を抑えることができない」「子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ」「子どもの考えていることがわからない」の項目から構成されており『感情統制不全感』因子と命名した。

### 3) 父母で共通する育児感情構造

父母の育児感情の構造が異なったことから、父

母での差を明らかにする目的で、父母で共通する育児感情の構造を導出した。そのために、育児感情26項目について、因子分析(主因子法・バリマックス回転)による因子構造の解明を、父母を込みにしておこなった(表12)。固有値が1.0以上を1つの目安とし、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移をも考慮し、単一の因子に.40以上の因子負荷量をもつ項目による因子の解釈から、4因子構造(15項目)が適当であると判断した。

第1因子は、「親として子どもに対する優しさが足りないのではと思う」「心の底では子どもがかわいくないときがある」「子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある」「子どもを叱るとき、感情を抑えることができない」「ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う(逆転項目)」「人からダメな親だと思われぬか心配になる」の項目から構成されており『感情統制不全感』因子と命名した。

表12：父母に共通する育児感情構造

	F1	F2	F3	F4	共通性
<b>【感情統制不全感】</b>					
親として子どもに対する優しさが足りないのではないかと思う	.780	.014	.164	.032	.636
心の底では子どもがかわいくないときがある	.576	-.207	.116	.245	.449
子どもの相手をするのが煩わしいと感じることがある	.565	-.185	.090	.272	.436
子どもを叱るとき、感情を抑えることができない	.541	-.114	.161	.033	.333
ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う	-.479	.133	-.250	.006	.309
人からダメな親だと思われたいか心配になる	.436	.024	.243	.271	.323
<b>【育児幸福感】</b>					
子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする	-.026	.642	-.107	-.164	.452
子どもを育てることで、自分も育っていると感じる	-.090	.584	-.185	.148	.405
子どもを育てている自分に誇りを感じる	-.187	.513	-.030	.035	.300
<b>【育児不安感】</b>					
子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ	.198	-.276	.620	.222	.550
子育てについて誰に(どこに)聞けばよいのかわからないので不安である	.171	-.046	.494	.089	.284
子どもの考えていることがわからない	.210	-.070	.483	.021	.283
<b>【自己疎外感】</b>					
毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である	.095	.088	.275	.673	.545
子育てに時間がとられるので、自分のやりたいことができない	.132	.051	.093	.467	.247
子どもに接する時間がもっと欲しい	-.076	.306	.145	-.440	.314
負荷量の平方和	2.161	1.312	1.210	1.182	5.866
寄与率(%)	26.1	11.1	9.4	8.2	54.9
信頼性係数( $\alpha$ )	.777	.582	.624	.515	

注) 主因子法・バリマックス回転による。因子負荷量の絶対値.40以上を太字とした。

第2因子は、「子どもを持ったことで人生が豊かになった気がする」「子どもを育てることで、自分も育っていると感じる」「子どもを育てている自分に誇りを感じる」の項目から構成されており『育児幸福感』因子と命名した。

第3因子は、「子育てのように、はっきりした答えがないようなことに取り組むのは苦手だ」「子育てについて誰に(どこに)聞けばよいのかわからないので不安である」「子どもの考えていることがわからない」の項目から構成されており『育児不安感』因子と命名した。

第4因子は、「毎日子どもの相手ばかりしていると、世間から取り残されそうで不安である」「子育てに時間がとられるので、自分のやりたいことができない」「子どもに接する時間がもっと欲しい」の項目から構成されており『自己疎外感』因子と命名した。

#### (5) 父母間での「育児規範」, 「パートナーとの関係認知」, および, 「育児感情」の差違

##### 1) 父母間での「育児規範」の差違

父母間での「育児規範」の差違を明らかにするために、「奉仕的育児観」と「親の責任感」の育児規範因子ごとで、項目の評定得点の平均を「育児規範因子得点」として算出した。いずれも、1点から4点に分布し、得点が高いほど「奉仕的育児観」と「親の責任感」を強く抱くように得点化した。分散分析により、父母間での両育児規範因子得点の差の検定をおこなった。その結果、「奉仕的育児観」は、母親( $M=2.78, SD=0.50$ )より父親( $M=2.94, SD=0.65$ )が有意に強く抱いていた( $F(1,284)=5.44, p<.05$ )。しかし、「親の責任感」は、母親( $M=2.38, SD=0.68$ )と父親( $M=2.41, SD=0.76$ )とに、有意な得点の差は認められなかった( $F(1,283)=0.19, n.s.$ )。

##### 2) 父母間での「パートナーとの関係認知」の差違

父母間での「パートナーとの関係認知」の差違を明らかにするために、「パートナーとの関係認知」項目の評定得点の平均を「パートナーとの関係認知得点」として算出した。1点から4点に分布し、得点が高いほどパートナーとの関係をポジ

タイプに認知しているように得点化した。そのため、「子育てのために、パートナーの気持ちが自分から離れてしまいそうで不安である」と「育児についてパートナーと意見が合わないことが多い」の項目は、得点を逆転して計算した。分散分析により、父母間での「パートナーとの関係認知得点」の差の検定をおこなった。その結果、母親 ( $M=3.22, SD=0.57$ ) と父親 ( $M=3.30, SD=0.46$ ) とに、有意な得点の差は認められなかった ( $F(1,272)=1.58, n.s.$ )。

### 3) 父母間での育児感情の差違

父母間で「育児感情」の差違を明らかにするために、「感情統制不全感」「育児幸福感」「育児不安感」「自己疎外感」の育児感情因子ごとに、項目の評定得点の平均を「育児感情因子得点」として算出した。いずれも、1点から4点に分布し、得点が高いほど、感情統制不全感、育児幸福感、育児不安感、自己疎外感を強く抱くように得点化した。そのため、感情統制不全感因子の「ここまでのところ子育てはうまくいっていると思う」と、自己疎外感因子の「子どもに接する時間ももっと欲しい」の項目は、得点を逆転して計算した。これら育児感情因子得点について、分散分析により、父母間での得点の差の検定をおこなった。その結果、「感情統制不全感」は、父親 ( $M=1.67, SD=0.45$ ) より母親 ( $M= 2.06, SD=0.60$ ) が有意に強く抱いていた ( $F(1,278)=37.67, p<.001$ )。また、「自己疎外感」は、父親 ( $M=1.79, SD=0.52$ ) より

母親 ( $M= 2.25, SD=0.65$ ) が有意に強く抱いていた ( $F(1,281)=40.10, p<.001$ )。そして、「育児幸福感」は、父親 ( $M=3.31, SD=0.58$ ) より母親 ( $M=3.44, SD=0.53$ ) が有意に抱く傾向にあった ( $F(1,283)=3.76, p<.10$ )。しかし、「育児不安感」については、母親 ( $M=1.75, SD=0.61$ ) と父親 ( $M=1.74, SD=0.56$ ) とに、有意な得点の差は認められなかった ( $F(1,282)=0.01, n.s.$ )。

### (6) 育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との関連

育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との関連 (図1) を明らかにするために、父母別、および、父母込みで、パス解析をおこなった。解析は、ステップワイズ法による重回帰分析を、偏回帰係数の有意水準5%を基準に設定しておこなった。

#### 1) 母親における育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との関連

母親についてのパス解析の結果 (図2), 母親では、パートナーとの関係認知から育児幸福感に正の影響 ( $\beta=.285, p<.001$ ) が認められた。また、パートナーとの関係認知から感情統制不全感、育児不安感に負の影響 (それぞれ、 $\beta=-.248, p<.01$ ;  $\beta=-.276, p<.001$ ) が認められた。

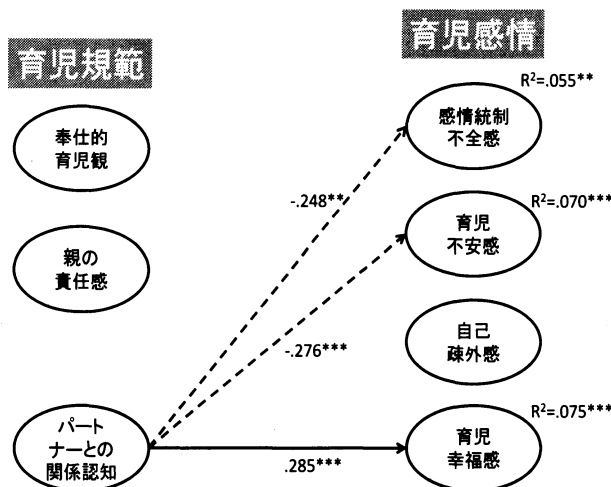


図2：母親における育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との関連

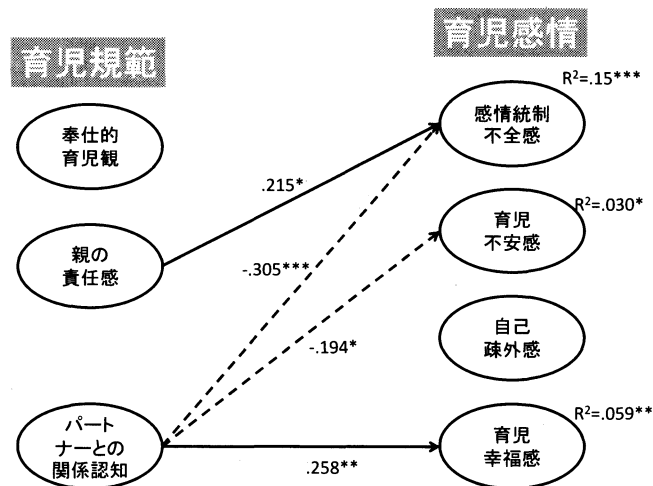


図3：父親における育児規範，および，パートナーとの関係認知と育児感情との関連

## 2) 父親における育児規範，および，パートナーとの関係認知と育児感情との関連

父親についてのパス解析の結果(図3)，父親では，パートナーとの関係認知から育児幸福感に正の影響( $\beta = .258, p < .01$ )が認められた。また，パートナーとの関係認知から感情統制不全感，育児不安感に負の影響(それぞれ， $\beta = -.305, p < .001$ ； $\beta = -.194, p < .05$ )が認められた。さらに，育児規範の親の責任感から感情統制不全感に正の影響( $\beta = .215, p < .05$ )が認められた。

## 4. 考察

### (1) 育児規範

母親の育児規範の構造は，「親の責任感」，「正しい育児」，「奉仕的育児観」の3因子構造であった。また，父親の育児規範の構造は，「奉仕的育児観」「親の責任感」の2因子構造であり，因子を構成する項目は，それぞれ，母親と同じであった。そして，父母で共通する育児規範の構造は，「奉仕的育児観」「親の責任感」の2因子構造であり，因子を構成する項目は，母親と父親のそれぞれと同じであった。父親より母親の方が，因子数が多いことは，育児に対する母親の多様な関わりを意味していると考えられる。そして，母

親にのみ，「正しい育児」規範因子が認められたことは，「正しい育児」規範因子が，「自己流のしつけで失敗してはいけない」や「正しい知識を身に付けるべき」などの，育児に関する実際的な育児規範であると考えられる。またこれは，内容的にも，時間的にも，母親が育児を担っている現状を反映しているものと考えられる。

母親と父親，そして，父母に共通して，「奉仕的育児観」と「親の責任感」の育児規範因子が認められたことは，これらの理念的な育児規範が，父母で共有されていることを表している。さらに，「奉仕的育児観」は，父親は母親よりも，有意に強く抱いており，父親は母親よりも，子どものためには，どんなことでもして，自分のことを我慢し，怒鳴ってはいけないと考えていることが明らかになった。また，「親の責任感」は，父母で，抱く強さに差がなかった。

### (2) パートナーとの関係認知

パートナーとの関係認知は，母親，父親，そして，父母で共通して，一次元構造であり，パートナーが自分をねぎらってくれ，できないことを代わりにやってくれるというサポート的な関係か，育児に関する意見の相違や，育児により気持が離れてしまうことへの不安というネガティブな関係

かという、対極的な関係認知を父母共にしていることを表している。そして、父母共に、パートナーとの関係を、ややポジティブな関係であると認知していた。

### (3) 育児感情

母親の育児感情の構造は、「感情統制不全感」「自己疎外感」「育児不安感」「育児幸福感」の4因子構造であった。父親の構造は、「育児不安感」「育児幸福感」「感情統制不全感」の3因子構造であった。また、父母共に共通する構造は、「感情統制不全感」「育児幸福感」「育児不安感」「自己疎外感」の4因子構造であった。父親より母親の方が、因子数が多いことは、育児において経験する感情の多様性を表していると考えられる。父親には認められず、母親に認められた育児感情因子は、子育てのために、世間から取り残されそうな不安や、何のために生きているのかという「自己疎外感」因子であった。そして、「自己疎外感」は、母親が父親よりも、強く抱いていた。さらに、「感情統制不全感」も、母親は父親よりも、強く抱いており、加えて、「育児幸福感」は、母親は父親よりも、強く抱く傾向があった。また、「育児不安感」を抱く強さは、父母で差がなかった。

これらから、母親にとって、育児は、精神的なストレス源になり、社会からの孤立に繋がり、自己を脅かすものであるが、同時に、母親は育児に伴う幸福感を父親よりも強く抱く傾向にあることが示唆され、母親にとっての育児の多様性、重要性、複雑性が示唆された。

### (4) 育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との規定関係

育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との規定関係について、母親では、パートナーとの関係認知がポジティブであれば育児幸福感を、ネガティブであれば育児不安感と感情統制不全感を感じる事が示唆された。父親では、母親と同様に、パートナーとの関係認知がポジティブであれば育児幸福感を、ネガティブであ

れば育児不安感と感情統制不全感を感じる事、加えて、親の責任感を強く抱けば感情統制不全感を強く感じる事が示唆された。すなわち、父母共に、育児の環境的要因としてのパートナーとの関係認知が育児感情を規定するが、加えて、父親では、個人的要因としての親の責任感の強さが感情統制不全感に繋がる事が示唆された。この父母の違いは、母親の育児感情は、現実的な、パートナーとの関係の認知が規定するが、父親の育児感情は、現実的なパートナーとの関係認知と、理念的な育児規範とが規定していると考えられる。言い換えれば、現実的に育児の多くの側面を担う母親と、相対的に育児の限られた側面を担う父親という違いが、背景にあるように考えられる。

### (5) 今後の課題

本研究では、育児規範、および、パートナーとの関係認知と育児感情との規定関係を明らかにすることを目的としてきたが、育児感情を規定する要因は、他にもあると考えられる。このことは、パス解析(重回帰分析)における決定係数の低さにも表れている。例えば、父母の社会的要因(年齢、就労形態、学歴など)、あるいは、子育て環境(子どもの預け先の有無、子どもの年齢、子どもの出生順、保育所通園など)との関連をみることから、より実際の育児の実態を明らかにすることができると考えられる。

### 注記

本論文は第50回日本社会心理学会での発表(田中・泊・西河ら, 2009)<sup>(5)</sup>に加筆修正したものである。

### 引用文献

- (1) 古田雅明・加藤美智子・田中優・泊真児・西河正行・深津千賀子・福島哲夫・向井敦子・八城薫(印刷中). 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティ再生に関する実践研究① — 調査データの基礎的

分析 大妻女子大学人間関係学部 人間関係学研究, 11

- (2) 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- (3) ラザルスR.S.・フォルクマンS (1991). 本明寛・春木豊・織田正美 (訳) ストレスの心理学 — 認知的評価と対処の研究 実務教育出版. (Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal and Coping*. New York: Springer.)
- (4) 山川玲子・柏木恵子 (2004). 母親の子ども・育児感情 — 虐待の温床としての育児不安の要因 — 文教学院大学紀要, 6-1, 185-200.
- (5) 田中優・泊真児・西河正行・向井敦子・八城薫 (2009). 家庭・学校・地域における「子育て」コミュニティの再生に関する実践研究 — 子育てにおける問題, 問題の解決方法, および, 育児観について —, 日本社会心理学会第50回大会発表論文集, 836-837.

## 謝辞

本調査に先立ち、インタビューにご協力くださった専門家の先生方に感謝申し上げます。また、調査の取りまとめにご協力くださった保育園のスタッフの方々、ならびに、子育てでお忙しい中、調査にご回答くださいました多くの方々に感謝申し上げます。